2008. 10. 11

古墳時代の日韓関係と筑紫

＜騎馬民族説＞の考古学的検討

Ⅰ．はじめに

石田英一郎・江上波夫・岡正雄・八幡一郎，１９４９「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」『民族学研究』第１３巻第３号
江上波夫，１９６７『騎馬民族国家　－日本古代史へのアプローチ』中公新書１４７

Ⅱ．江上波夫氏の騎馬民族征服王朝説，いわゆる騎馬民族説

江上氏によると、3 世紀の前半には、現在の中国大陸の東北地方に当たる北方において、高句麗国家を形成していた夫余族が、朝鮮半島を南下して狗邪地方（現在の慶尚南道金海市付近）を支配していた。この騎馬民族は、3 世紀末から 4 世紀初めの崇神天皇の時代に、その当時、すでに加耶（加羅・任那）と呼ばれるようになっていた地域から、さらに筑紫つまり現在の北部九州に渡って、その地を征服したといわれる。そして、その騎馬民族は筑紫に 100 年ほどとどまった後、応神天皇の時代に、現在の近畿地方の一角にあった大和（ヤマト）に進出し、強大な王権を樹立したとされるのである。

Ⅲ．乗馬・騎馬　－　馬具の系譜

（1）高句麗
（2）百済
（3）新羅
（4）加耶
（5）倭とくに筑紫

Ⅳ．馬の飼育　－牧の問題

馬の埋葬土壙

Ⅴ．おわりに

宮崎県立考古博物館　　日韓交流展「それでも騎馬文化はやってきた」（平成１６　－２００４年１０月９～１２月１２日）

いわゆる騎馬民族説をめぐって

西谷　正（九州大学名誉教授、伊都国歴史博物館館長）

古代における日韓関係の歴史を考えるとき、重要な仮説の一つとして、いわゆる騎馬民族説がある。1948（昭和23）年に、江上波夫氏がはじめて同説、すなわち、騎馬民族征服王朝説を提唱されて以来、その後に公刊された著作などを通じて今日まで、ひじょうに興味深い学説として、同説をめぐって多くの論議を呼んできた。

戦後の混乱期に、日本人は精神的なよりどころを求めて、日本の民族や国家の起源に大きな関心をもっていただけに、この学説は衝撃的であり、画期的なものであった。

江上氏によると、3世紀の前半には、現在の中国大陸の東北地方に当たる北方において、高句麗国家を形成していた夫余族が、朝鮮半島を南下して狗邪地方（現在の慶尚南道金海市付近）を支配していた。この騎馬民族は、3世紀末から4世紀初めの崇神天皇の時代に、その当時、すでに加耶（加羅・任那）と呼ばれるようになっていた地域から、さらに筑紫つまり現在の北部九州に渡って、その地を征服したといわれる。そして、その騎馬民族は筑紫に100年ほどとどまった後、応神天皇の時代に、現在の近畿地方の一角にあった大和（ヤマト）に進出し、強大な王権を樹立したとされるのである。

このうちまず、高句麗を見ると、『三国史記』の高句麗本紀は、紀元前37年に当たる年に建国したと伝える。江上氏は、高句麗を騎馬民族と規定されるが、高句麗の活躍の舞台は山間部やその流域平野にあり、早く新石器時代以来、農業・牧畜・漁労・植物採集など多様な労働活動によって生活資源を獲得していた。高句麗が5世紀の全盛期に広大な領土を支配するようになった背景には、確かに強力な騎馬軍団を抱えていたことが考えられる。しかし、騎馬の風習を示す根拠は、考古学的に見てもおそらく4世紀後半をさかのぼらないであろう。

そのころ、高句麗では、広開土王（好太王）が、その諡のとおり、領土を広く開拓した。その際に、高句麗は騎馬戦法を大いに駆使したことが、『三国史記』高句麗本紀の記述や広開土王碑の銘文からうかがえる。そこでは、高句麗は新羅を支援する一方、百済とは戦闘を繰り返した。その過程で、高句麗の騎馬戦法が、新羅と百済にそれぞれ伝えられたと考える、そしてさらに、高句麗は、永楽10（400）年に、新羅を侵略した倭を追って任那加羅に迫ったと、広開土王碑文は記している。このことが契機となって、高句麗の騎馬戦法が、新羅や百済の場合と同様に、倭や任那加羅つまり加耶へも連鎖的に伝播したと考える。

事実、4世紀末から5世紀前半にかけての時期に、百済や新羅の古墳から馬具が出土しはじめる。一方、加耶の地域では、1980年から翌年にかけて行われた釜山広域市の福泉洞古墳群に対する大規模な発掘調査は、5世紀前半の馬具を中心とする騎馬文化の研究に画期的な成果をもたらした。たとえば、木心鉄張輪鐙や馬冑などの馬装に加えて、甲冑に身を固め、胡籙を装備した騎馬兵の姿を彷彿とさせる遺物の数々を出土した。その後も、加耶の古墳の調査は、慶尚南道の陜川玉田や咸安など各地で実施された。とくに、陜川玉田古墳群出土の馬冑は、加耶における馬冑の普及をうかがわせた。また、咸安道項里の古墳ではほぼ完全な状

態で馬甲が出土したことは、高句麗の双楹塚古墳などの壁画に描かれた馬甲の実物例として注目される。

ところで、日本における馬具の初例は、福岡市の老司古墳や福岡県の池ノ上古墳で出土した、4世紀末ないし5世紀初ころの轡がよく知られる。ついで、5世紀中ごろから後半にかけてのころのものでは、宮崎市の下北方5号地下式横穴出土の馬具のセットが初期の数少ない例の一つとして重要である。すなわち、木心鉄張輪鐙・三環鈴・馬鐸などである。また、近畿地方でも、滋賀県の新開1号墳出土の木心鉄張輪鐙などが知られ、それらは前記の福泉洞古墳群の出土品などに系譜が求められる。加耶の古墳出土の馬甲・冑もまた、5世紀後半の和歌山市の大谷古墳の出土例に通じる一方で、高句麗古墳壁画に描かれた馬甲・冑に起源が求められるものである。

このように高句麗から、百済・新羅・加耶そして倭へとつながる馬具の系譜は、6世紀後半まで引き継がれたことを、たとえば蛇行状鉄器においても認めることができる（図参照）。

このように見てくると、かつて小林行雄氏が指摘されて以来現在でも、日本における馬具の出土状況から考えて、乗馬もしくは騎馬の風習が始まるのは、紀元400年前後のころからであり、それがしだいに普及するのは5世紀中葉以後のことであって、江上波夫氏がいわれる300年前後における騎馬民族渡来説とは矛盾する。

また、乗馬の風習なり、騎馬の戦法にしても、あくまでも風習や戦法の伝来であって、けっして騎馬民族の渡来や、騎馬民族による征服を物語るものではない。むしろ、5世紀のころ同じように農耕民族であった、加耶すなわち韓国の東南部から、倭すなわち現在の北部・南部九州や近畿地方へと、乗馬・騎馬の風習が伝来したということである。

一方、騎馬民族による征服王朝説についても、加耶ではその存在を示すような根拠はまったく認められない。現在の北部九州に当たる筑紫では、3世紀末までに、たとえば福岡県の石塚山古墳のように、堂々とした前方後円墳で、内部の竪穴式石室からは三角縁神獣鏡が出土している。現在、このような古墳文化を畿内型古墳と規定し、大和王権が筑紫を服属させ、支配していた物証と考えられている。

また、最近までに筑紫の各地で、庄内式土器といういわゆる畿内系の土師器が発見され、そこに畿内系文化の流入現象を認める。

つぎに、紀元300年前後の時期における日韓交流の問題を考えると、福岡市の西新町遺跡などでは、加耶からもたらされたと考えられる鉄素材や土器などの遺物ばかりか、竪穴式住居における作り付け竈といった遺構が検出されることは注目される。しかし、これらの諸現象とて、3世紀以来、北部九州と韓国南岸地域との間で行われていた交易・交流の結果として位置づけるべきであろう。

ところで、上述したように、5～6世紀には、日本で乗馬・騎馬の風習が始まり、しだいに定着していった。その結果、馬の飼育へと発展していったようである。文献史料からは、大和王権に特殊な技能をもって直属、奉仕した品部としての馬飼部や、馬の飼育場である牧の設置が知られる。

他方、考古学的には、そのことに関連すると思われる遺跡がいくつか調査されている。福岡県の三沢古墳群では、6世紀中ごろの古墳の周辺で、馬を埋葬した土壙墓が20基ほど見つかっている。調査を担当された宮田浩之氏は、短時間に祭祀的な行為として馬を20頭も殉葬することから、この周辺における馬の飼育を推定される。そして、その付近に遺構がまった

くないことから、その空間が牧であったことをも推測されている。宮田氏はさらに続けて、そのことから『日本書紀』欽明天皇15（554）年の条に、筑紫に滞在していた内臣は、ふたたび百済から援軍要請を受け、「ただちに援軍の数は1000人、馬100匹、船40隻を派遣しよう」と返答したという記事に注目される。つまり、馬に関して筑紫における牧もしくは各地から運ばれた馬の管理施設を想定され、さきの三沢古墳群周辺に当たる三国丘陵をその可能性が高い場所として考えられた。

北部九州では、律令時代の肥前に当たる佐賀市の牟田寄遺跡において、古墳時代中期ごろの土壙から木製鞍が出土している。同じ遺跡で6世紀前葉から7世紀前葉にかけて掘立柱建物は検出されるものの住居が欠落しているため、通常の集落とは考えにくく、牧の存在も想定されている。

そこで、想起するのが、宮崎市の下ノ原第一遺跡における調査所見である。ここでは、円墳の周囲で、6世紀前半〜中葉ごろの、馬具を着装した馬の埋葬土壙が6基検出されたのである。三沢古墳群の調査成果に照らして、日向においても牧が存在した可能性が出てきたのではなかろうか。その場合、白石太一郎氏が指摘されるように、長野県の伊那谷や善光寺平における百済系古墳の存在から考えて、牧の開設・経営に百済などからの渡来人の関与が推定されよう。

これまで見てきたように、紀元400年前後のころ、倭の北部九州にまず伝来した乗馬の習俗、いい換えれば騎馬文化は、直接的には加耶に起源がある。その加耶へは、高句麗から新羅を経て騎馬文化が波及した。一方、高句麗の騎馬文化は、百済へも伝播した。このような朝鮮半島から日本列島への騎馬文化伝来の背景には、当時の高句麗・新羅と百済・加耶・倭の二つの大きな勢力圏が拮抗するという国際情勢が関連していたことが考えられる。

北部九州にまず伝来した騎馬文化は、5世紀中ごろ以後、南部九州や近畿地方、さらにはそれ以東へと波及していったようである。以上のように、騎馬民族による征服王朝は成立しなかったものの、確かに「騎馬文化はやってきた」といえよう。

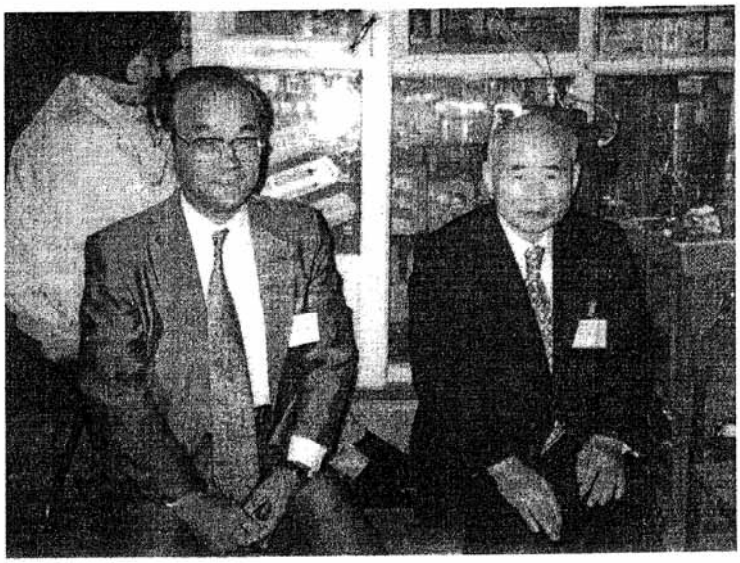
宮崎県立西都原考古博物館，2004『日韓シンポジウム　それでも騎馬文化はやってきた』発表要旨集

心に残る考古学者

4

20世紀最後の国際派巨星・江上波夫先生

西谷 正（にしたに ただし）
（九州大学名誉教授）



北海公園内にてひと休みされる江上先生とともに
（1996年9月19日）

思い起こせば40数年前，私が高校生のころ，江上波夫先生を団長とする東京大学の調査団は，イラクのテル・サラサートの発掘を手がけておられた。調査の状況は，現地から刻々と新聞報道されていた。それを見るにつけ，私の考古学熱は燃え盛っていった。そのうち私は，江上先生に直訴して調査に連れていってもらおうと真剣に考えたことであった。しかし，そのような願いは無理だと悟り，あきらめたが，それ以来，西アジア考古学への関心を持ち続けることになる。その後，九州大学での私の学生の中に，2・3人が私の夢を叶えてくれたかのように，トルコやイランの調査に参加し，専門的に研究する者が出てきたことは，教師冥利につきるというものであろう。このこと1つをとっても，江上先生は青年期の私たちに，古代文明に対する計り知れないロマンをふくらませてくださったことがわかる。

ところで，江上先生といえば，いわゆる騎馬民族説つまり騎馬民族征服王朝説の提唱者として，あまりにもよく知られている。1948（昭和23）年に行われた座談会の席上ではじめて披歴され，その後，『民族学研究』において御説が公にされた。つまり，日本国家の起源を北東アジア系の遊牧騎馬民族の征服によって説明しようとされたのである。その当時，私は小学生であったので，その時の学界状況を知る術もないが，スケールの壮大さはともかくとしても，万世一系の王朝史観を真正面から否定しようとする学説であってみれば，学界はもとより市民社会に与えた衝撃の大きさは察するに余りある。

私は，大学生から大学院生にかけてのころ，弥生文化成立過程の研究から，目が朝鮮半島へと向いていったが，そのうち，朝鮮の三国時代と日本の古墳時代の交流史へと関心が広がっていった。そうした矢先，騎馬民族説をめぐる議論が再燃するのであるが，それはずっと後年の1990年代に入ってからのことであった。その直接的な契機は，日韓それぞれの古墳で馬具の良好な資料が見つかったことに起因する。それまでに知られていた福岡市の老司古墳出土の初期の轡などに加えて，釜山市の福泉洞古墳群における馬冑などの発見である。ことに馬冑に関しては，高句麗古墳壁画の中の騎馬戦図に表現された馬冑の実物が，朝鮮半島ではじめて加耶の

古墳から出土したのである。それに対して，江上先生は騎馬民族説のミッシング・リンク（失われた環）がついに発見されたとされ，また，マスメディアは同説を補強するものとする論調を示した。一方で，加耶古墳調査の成果は，加耶と倭の密接な交流を物語るものとして，加耶に関する関心が高まり，日本古代史を朝鮮半島からさらには北東アジアの枠組みの中で考えていこうとする気運を昂揚させた。そのようにして，騎馬民族説は，日本の古代史を北東アジア史の視点でダイナミックに考えていこうとするものであり，私たちの視野をユーラシア大陸へと大きく広げさせた点で，江上先生のご功績は多大である。そして，そのような視座は，現在，後進によって継承，発展されている。

江上先生のご業績は，もちろん騎馬民族説にとどまらず，むしろそれはほんの一部といってよい。騎馬民族説の背景となった青年期の内蒙古長城地帯に展開した匈奴文化や，東大時代に行われた西アジアを舞台とした人類文明の起源に関する研究など，『江上波夫著作集』全13巻に見られるとおり，枚挙にいとまがない。

私は，九州大学の助教授時代に，江上先生が懇意にしておられた岡崎敬教授を時どき訪ねてこられた際に，何度かお目にかかったり，岡崎教授からお噂をいろいろうかがうことを通して，江上先生の人と学問から直接・間接の影響を受けた一人である。やがて江上先生が会長職にあられた日本考古学協会・アジア史学会・高句麗会でご一緒することが多くなった。そのうち，1996年のアジア史学会北京大会の折には，当時，体調は優れておられなかったにも拘らず，モンゴルの学者の発表に対して示された学的好奇心と情熱には圧倒されんばかりであった。その日の北海公園での夕食会の後，このときとばかり，介添えのつもりで腕組みをして，夕暮れの湖畔をエスコートしたことも，なつかしい思い出の1つとなっている（写真）。また，1986年には，朝鮮民主主義人民共和国への戦後初の日本学術文化代表団の一員としてご一緒したとき，高句麗文化に強い関心を示され，1992年には，江上先生原作（『騎馬民族国家』）による，朝鮮科学教育映画撮影所との合作映画「高句麗」となって結実したが，その当時の共和国を評して，おとぎの国のようだともらされていたことが印象的であった。ちなみに，ピョンヤンへ向けて発つ成田空港近くのホテルのロビーの片隅において，出発まぎわまで原稿を執筆されたり，さらには，機上の人となられるや校正を始められるなど，そこに尋常でない先生のお仕事ぶりの一面を見た思いがしたことであった。

ところで，江上先生は熊本の江上家縁りということもあってか，九州へはつねに熱いまなざしを向けておられた。とりわけ，1989年に吉野ヶ里遺跡が発見されると，ただちに足を運び，高い評価を与え，また，1980年から3年間，伊万里湾に浮かぶ長崎の鷹島における元寇の海底遺跡の調査では指導的な役割を果たされた。そのときに始まった調査は，現在も鷹島町教育委員会によって続けられている。そして，1971年におけるチグリス川下流域のアッシリア時代の沈没船の調査や，日本水中考古学会初代会長などからもうかがわれるように，日本における水中考古学研究の啓発と推進にも尽力された。

このように，ご専門の東西文化交流史・人類文明起源論の調査・研究にとどまらず，幅の広い学術研究のパイオニア・リーダーとして果たされた役割の大きさを振り返ると，20世紀最後の存在感に溢れた国際派巨星墜つの感を深くするのである。

江上先生はまた，日本学術会議会員として，国立考古博物館の設立勧告に尽力されたことを思い出す。この計画は実現しそうにないが，いま九州では，再来年秋の開館を目ざして，東アジア文明交流史をテーマとした国立博物館の開館準備が着々と進んでいる。その間，種々にわたって直接ご指導をいただけなかったことが悔やまれるとともに，開館の日をともに喜んでいただけないのが惜しまれる。

日本列島の初期馬具の変遷

	北部九州	近畿・西日本	東日本
4世紀後半～5世紀前半	1 2		0 10cm
5世紀前半～5世紀中葉	3 4	9 10 11 12	20 21

千賀　久，1994「日本列島における乘馬の風習の開始とその様相」第11回古代史シンポジウム

金元龍，1973「原城郡 法泉里 石槨墓外 出土遺物」『考古美術』120

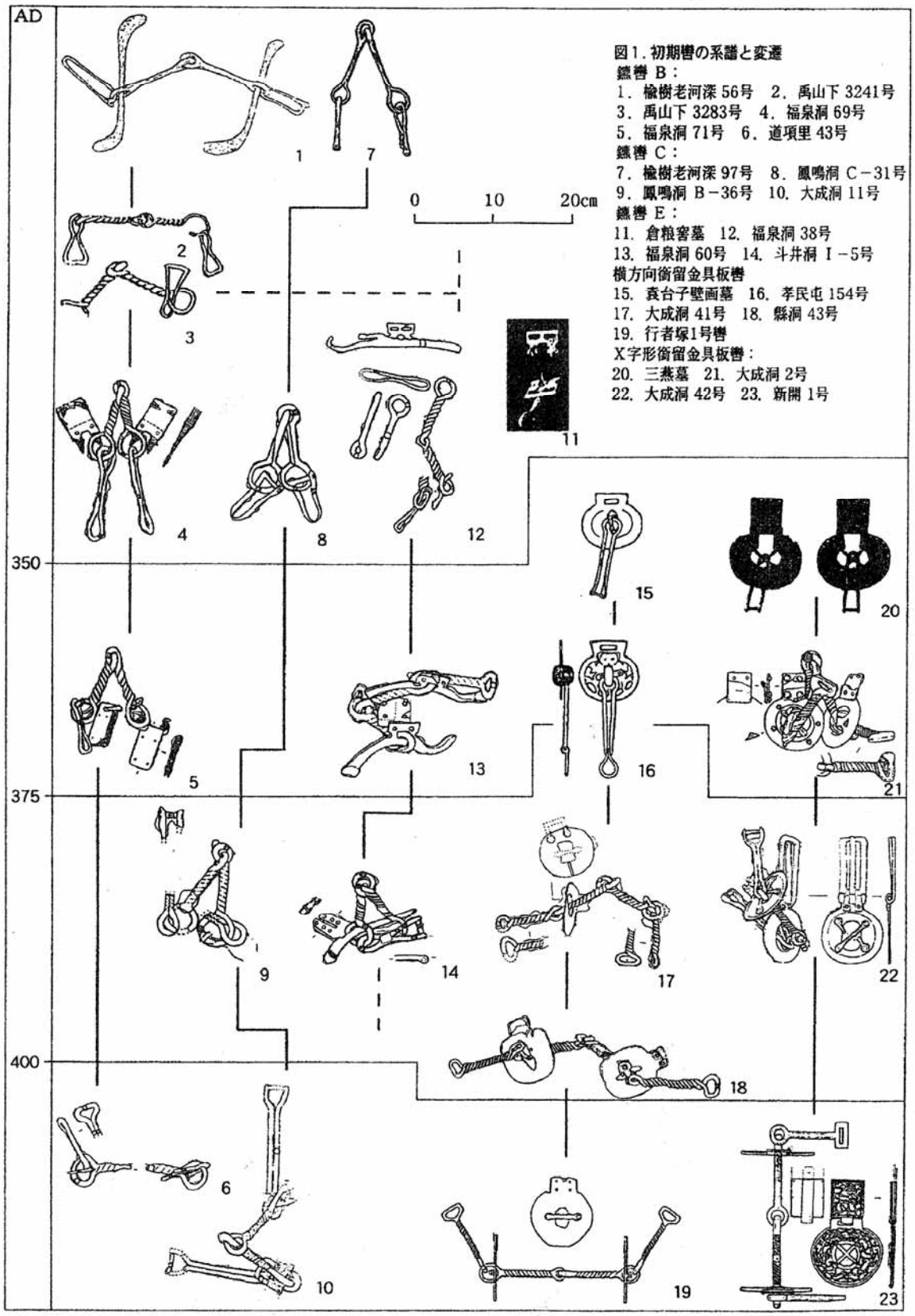


図1. 初期轡の系譜と変遷
鐶轡 B：
1. 楡樹老河深 56号　2. 禹山下 3241号
3. 禹山下 3283号　4. 福泉洞 69号
5. 福泉洞 71号　6. 道項里 43号
鐶轡 C：
7. 楡樹老河深 97号　8. 鳳鳴洞 C－31号
9. 鳳鳴洞 B－36号　10. 大成洞 11号
鐶轡 E：
11. 倉粮窖墓　12. 福泉洞 38号
13. 福泉洞 60号　14. 斗井洞 I－5号
横方向銜留金具板轡
15. 袁台子壁画墓　16. 孝民屯 154号
17. 大成洞 41号　18. 縣洞 43号
19. 行者塚1号轡
X字形銜留金具板轡：
20. 三燕墓　21. 大成洞 2号
22. 大成洞 42号　23. 新開 1号

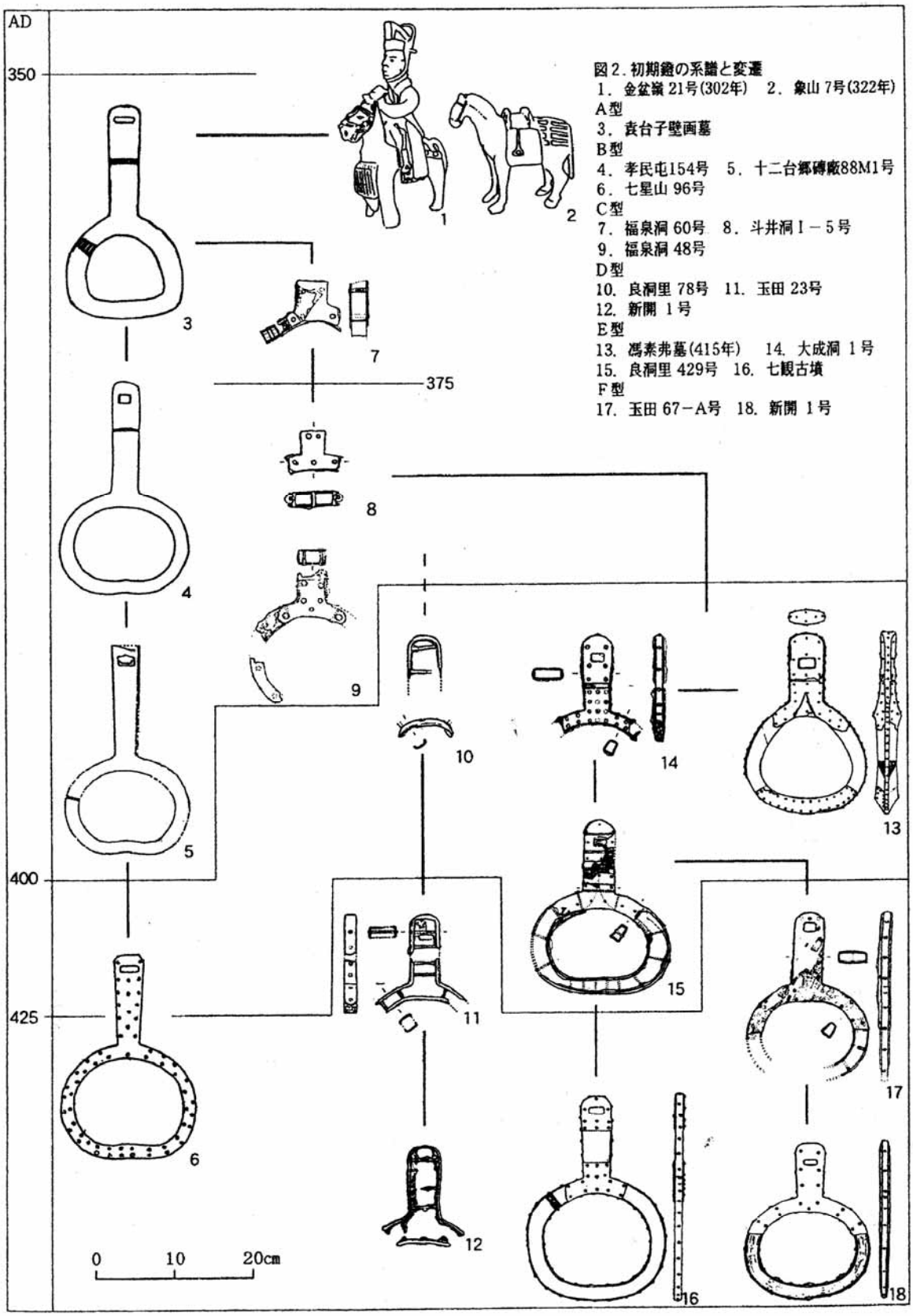
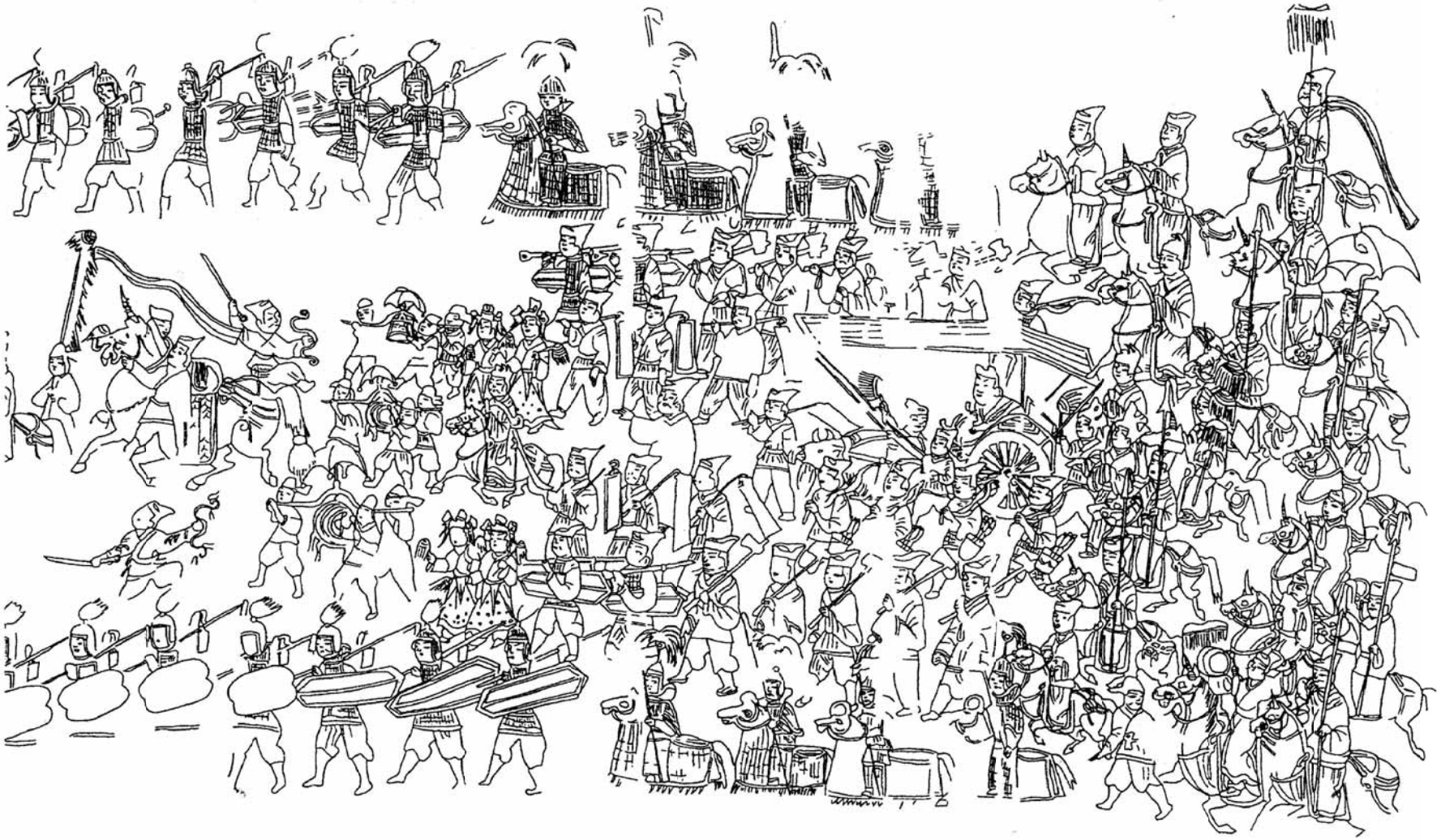
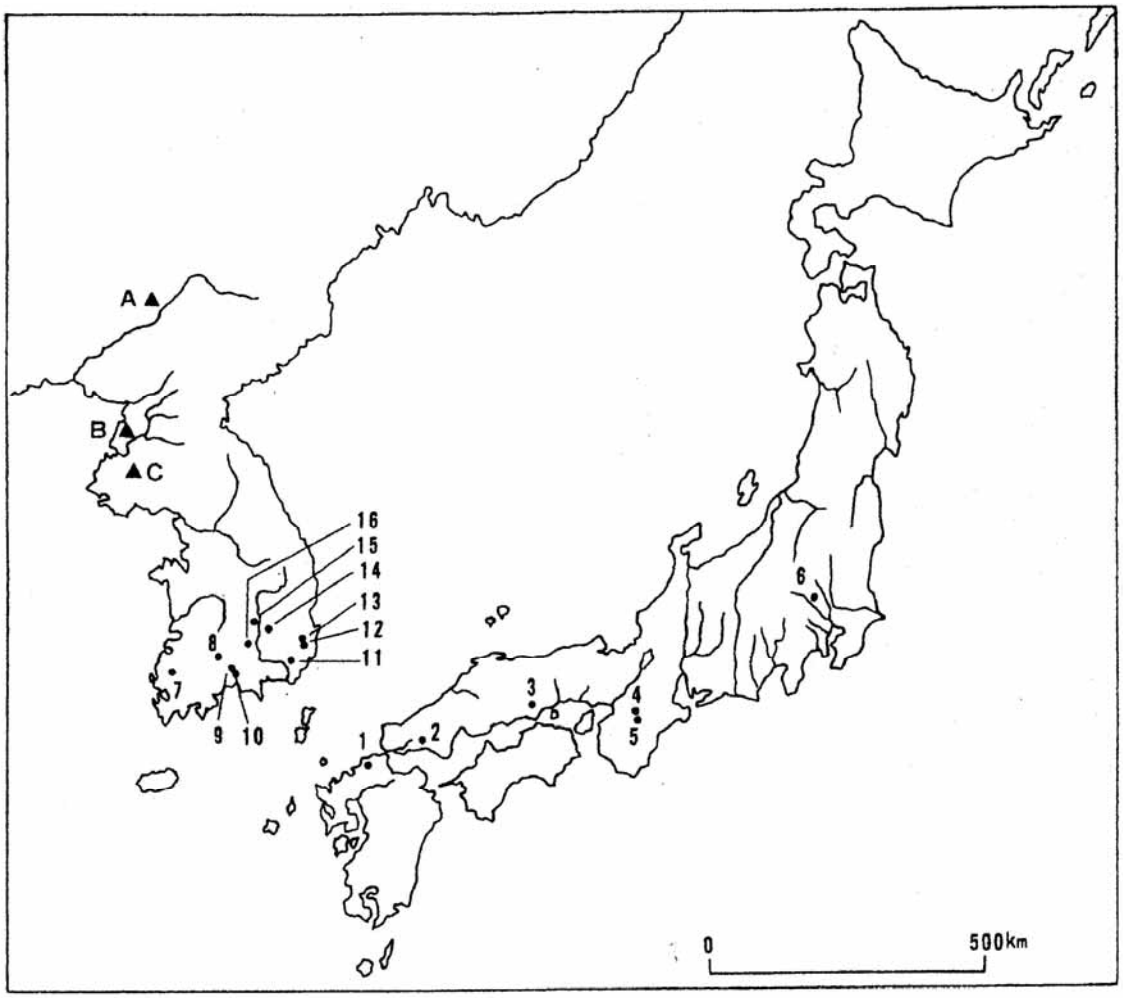


図2. 初期鐙の系譜と変遷
1. 金盆嶺 21号(302年)　2. 象山 7号(322年)
A型
3. 袁台子壁画墓
B型
4. 孝民屯154号　5. 十二台郷磚廠88M1号
6. 七星山 96号
C型
7. 福泉洞 60号　8. 斗井洞 I－5号
9. 福泉洞 48号
D型
10. 良洞里 78号　11. 玉田 23号
12. 新開 1号
E型
13. 馮素弗墓(415年)　14. 大成洞 1号
15. 良洞里 429号　16. 七観古墳
F型
17. 玉田 67－A号　18. 新開 1号



安岳第３号墳出行図（部分）

（菅谷文則「晋の威儀と武器について」『武器研究』1　2000　中川穂花氏製図より　一部改変）



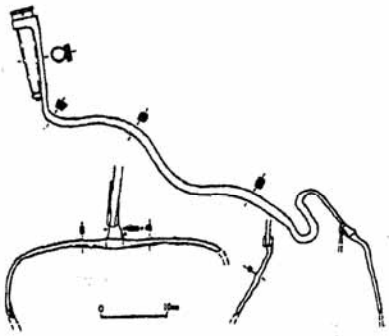
蛇行鉄器出土遺跡および関連古墳分布図

横田義章・児玉真一・伊崎俊秋，1981「手光南２号墳の概要と出土蛇行鉄器について」『福間町文化財調査報告書』第１集

双楹塚

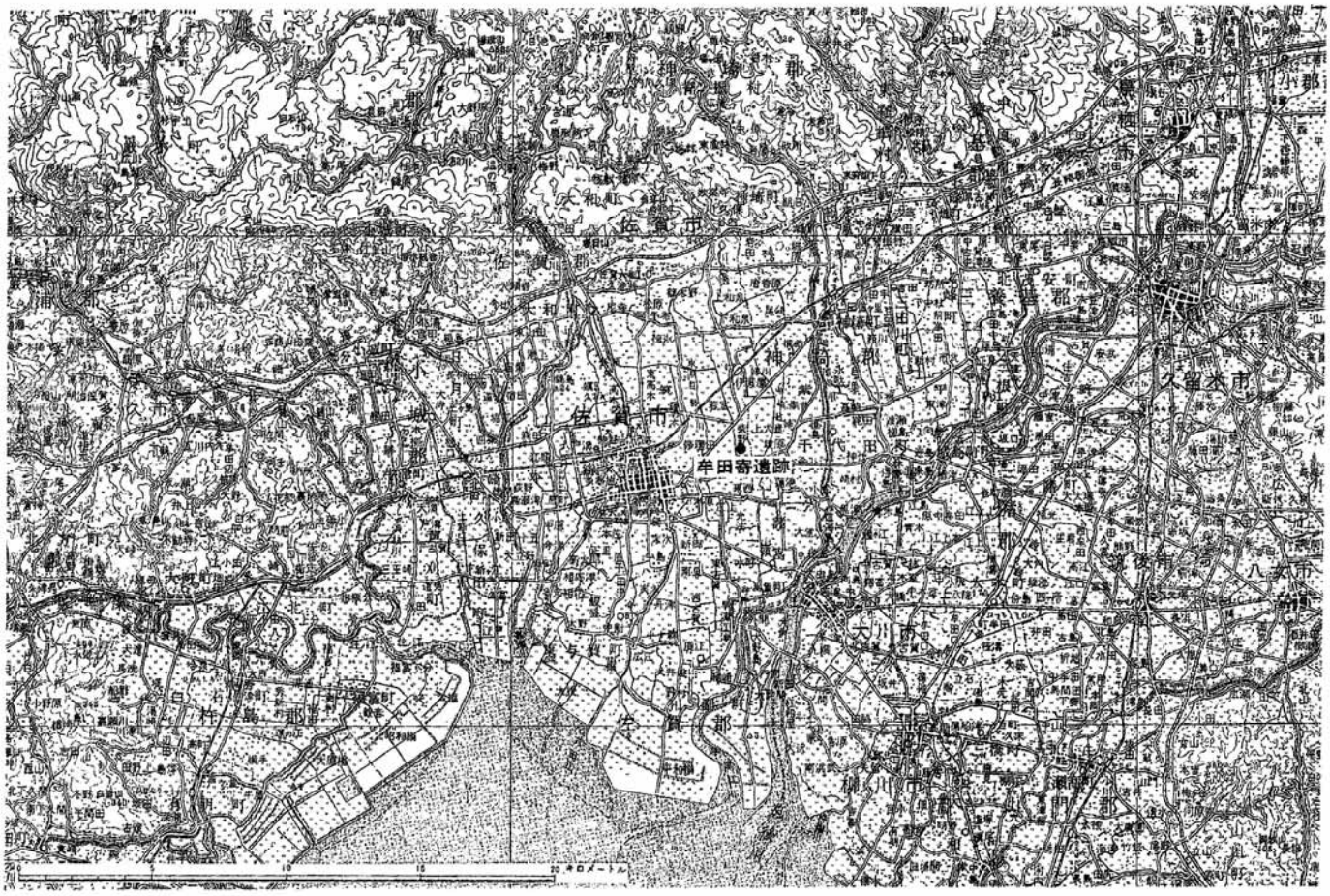
仁旺洞Ａ群第５号墳

蛇行状鉄器



水精峯２号墳

塚田良道，1992「東国の伽耶文化」『考古学ジャーナル』350

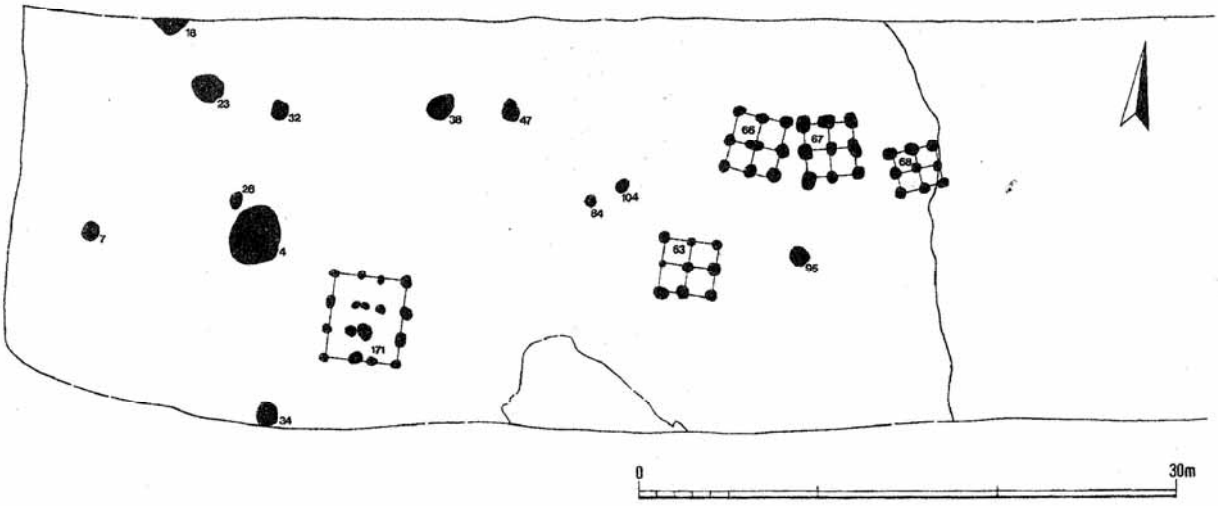


牟田寄遺跡位置図

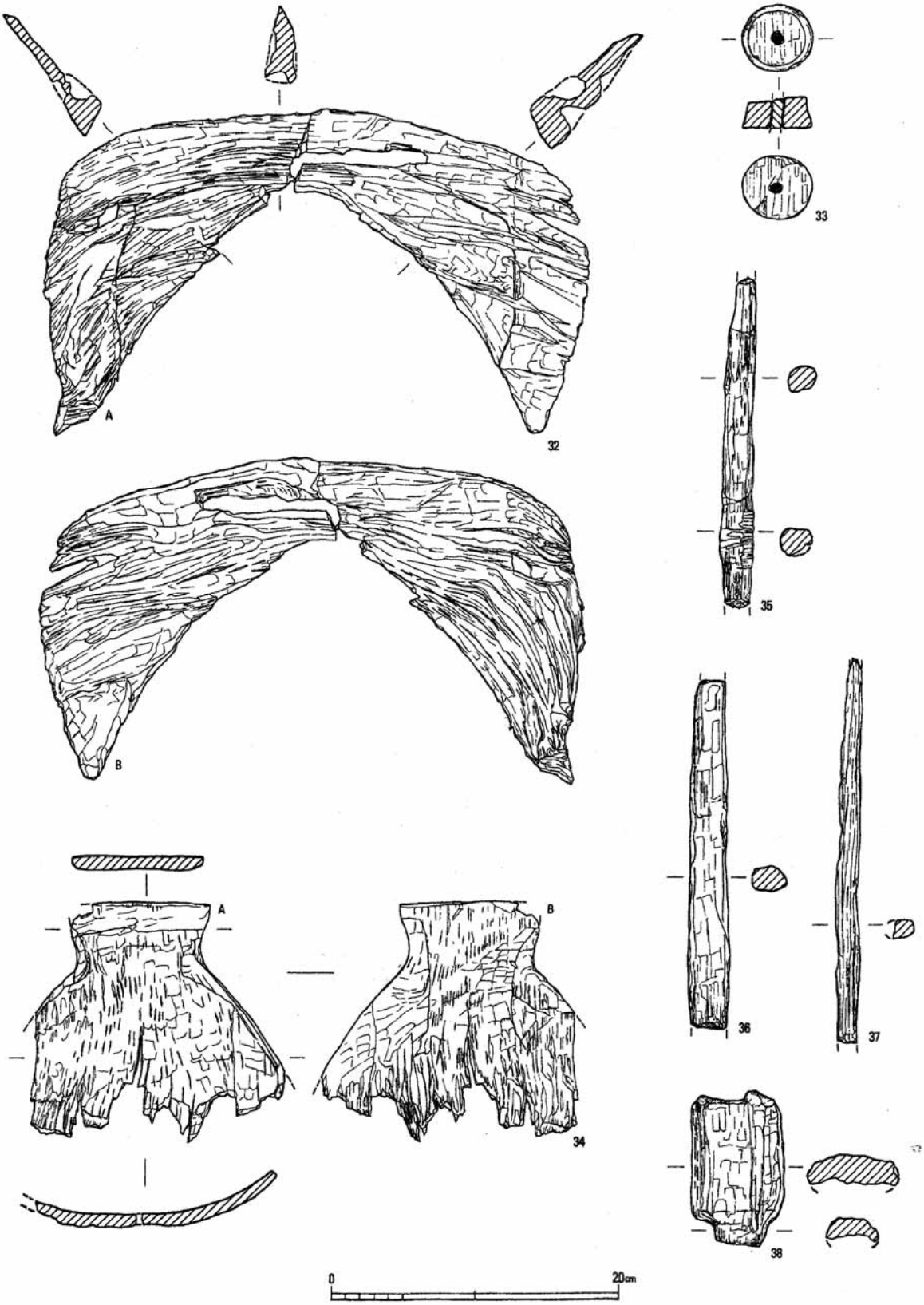
II　期

古墳時代中期から終末期（5世紀～7世紀前半）にかけてで、I期と比べると遺構が激減する。2×2間の総柱と3×3間の規模を有する掘立柱建物4棟と井戸11基、土坑1基から構成される。遺構同士の切り合い関係はない。掘立柱建物と井戸・土坑は必ずしも平行関係にあるわけではなく、井戸・土坑が5世紀前葉から6世紀前葉頃にかけて形成され、掘立柱建物が6世紀前葉から7世紀前葉にかけて構築されるようである。（ただしSB15171は時期不明で、井戸・土坑と平行関係にある可能性がある。）2×2間の建物は倉庫と考えられ、出土遺物及び位置関係から判断して、同時併存していたのではなく、1棟ずつ立て替えが行われた可能性がある。住居が欠落しているため通常の集落とは考え難い。SK15004土坑からは類例の少ない木製馬鞍が出土しており「牧」の存在が想定される。

II期



牟田寄遺跡15区遺構変遷図



SK15004 土坑出土遺物実測図

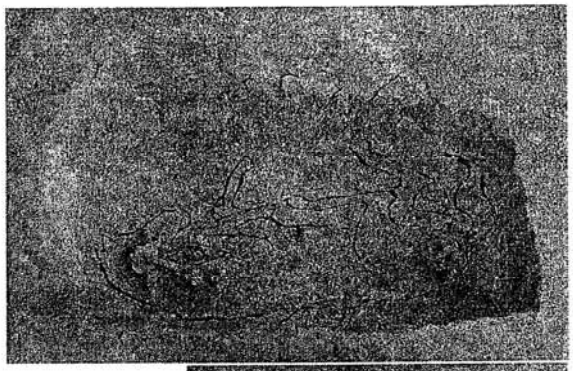
○ 101号土壙墓

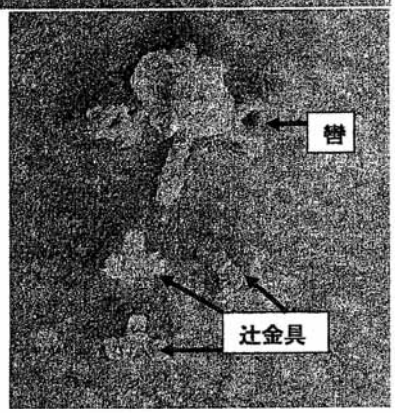
墓壙の大きさ

長さ 1.74m 幅 1.18m の隅丸長方形、深さ 60cm。

出土状態

墓壙北西隅の床面直上に轡、南側に辻金具 3 組が出土した。轡は銜（はみ）の連結部で前方に倒れ、片方の鏡板と引き手が裏返った状態で出土している。辻金具 3 組の出土状態から、面繋で連結された状態であったと考えられる。

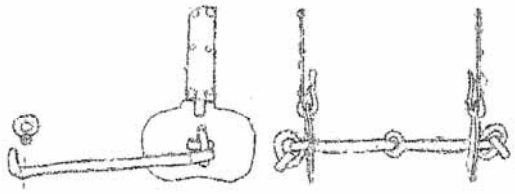




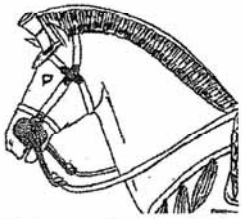
出土遺物

鉄製内湾楕円形鏡板付轡、辻金具 3 組、鉸具 1 組

轡は一部がやや凹んだ楕円形をした鏡板が付いたもので、透過 X 線撮影による観察では鏡板の外側で遊環（リング）を介して引き手と連結すること、鋲つきの板状の立聞が付くことなどから 5 世紀後半～末頃のものと考えられる



出土した馬具と同じ種類の轡（千葉県石ノ形古墳出土）



装着イメージ（赤の部分が今回出土した部分）

○ 102号土壙墓

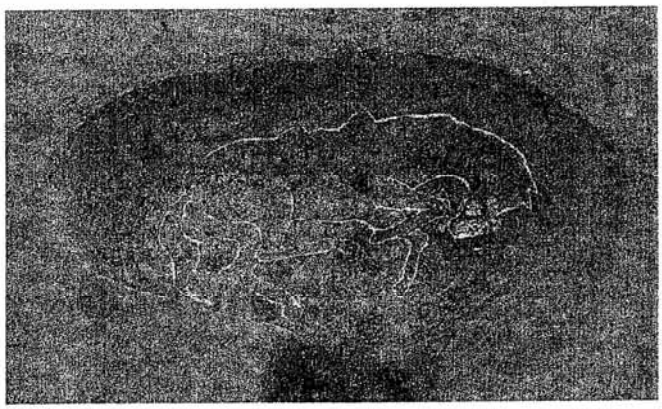
墓壙の大きさ

長さ 2.3m、幅 1.27m の楕円形、深さ 76cm。

出土状態

馬歯･･･墓壙の南西端床面から 5~6cm 浮いた状態で出土。

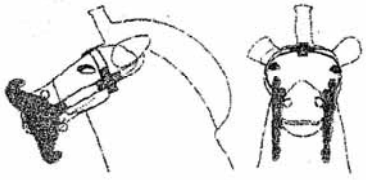
馬具･･･馬歯の北側 3~4cm 下の床面直上で片方の鏡板・引き手が出土。馬歯直下で辻金具 1 組、馬歯の南側墓壙壁際で鉸具 1 組が出土。やや離れたところで鉸具 3 組が出土。



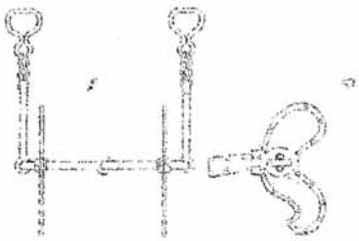
出土遺物

馬歯（臼歯）、鉄製 f 字形鏡板付轡、辻金具 1 組、鉸具 4 組

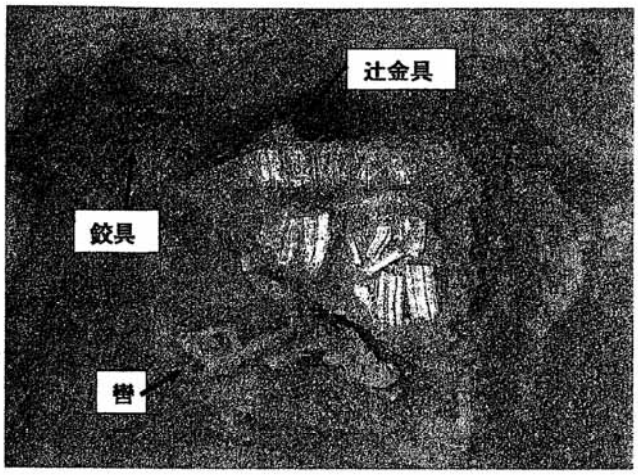
轡は「へ」の字に屈曲し、一方の先端がわずかに反り返った形をした鏡板が付いたもので、「f」字形鏡板付轡と呼ばれるもの。X 線撮影による観察では縁取りと鋲打ちが確認できることなどから 5 世紀後半～末頃のものと考えられる。

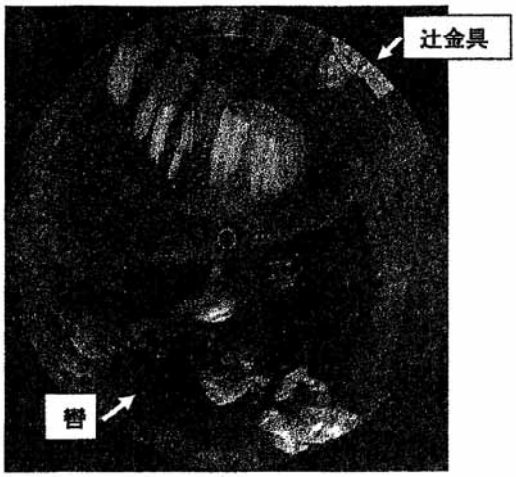


f 字形鏡板を付けた馬形埴輪(うきは市　塚堂古墳※赤の部分が出土)



出土した馬具と同じ種類の轡（千葉県石ノ形古墳出土）

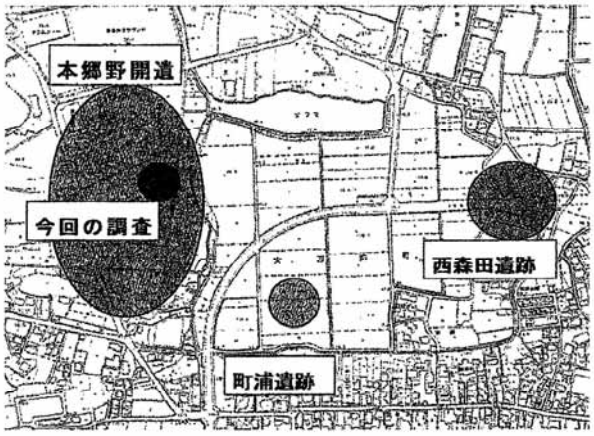




・　土壙墓は本郷鶯塚古墳群の中にあり、計画的に配置されている可能性がある。
・　馬具は轡とその付属品一式がまとまって出土していると考えられ、馬に装着されていたか、面繋を馬の頭部付近に置いたものと考えられる。

ま と め

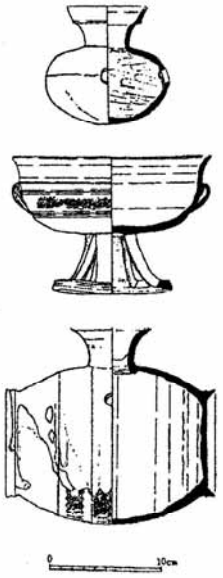
今回調査した馬の土壙墓は小規模な竪穴系横口式石室の古墳などで構成される墓域にある。土壙墓の近くの土壙墓からは5世紀後半～6世紀初め頃の須恵器が出土し、馬具の特徴からは5世紀後半～末頃と考えられる。県内では小郡市三沢古墳群・三国の鼻遺跡・井の浦遺跡・苅又遺跡群、筑紫野市諸田仮塚遺跡など三国丘陵に分布する遺跡では27例、那珂川町観音山古墳群で4例の古墳に伴う馬の土壙墓が発見されているが、これらは6世紀中葉以降に位置づけられており、今回の例は県内最古例となると考えられる。

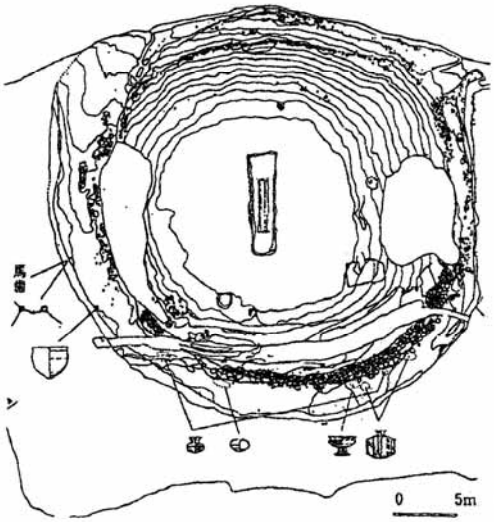


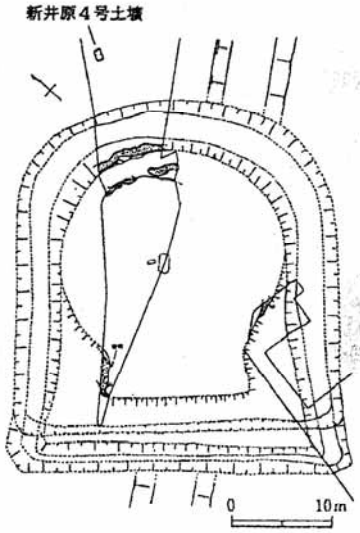
5世紀前半代に朝鮮半島から須恵器生産や鍛冶などの技術とともに馬及びその生産・流通などの技術がもたらされたとされ、それに伴って馬を埋葬するという風習も大陸から朝鮮半島を経由して日本に入ってきたと推定されている。本郷鶯塚古墳群の周辺では西森田遺跡の百済産高杯・初期須恵器・半島系土器、町浦遺跡の初期須恵器を用いた甕棺墓や、本郷野開遺跡の石蓋土壙墓に初期須恵器の大型甕を副葬した例は、初期須恵器生産にかかわった人々の墓とされる朝倉市池の上墳墓群と良く似た内容であるなど、朝鮮半島の文化との関わりが考慮される。今回調査した馬の土壙墓は馬を墓地に埋葬する習慣を持った集団の存在を示すものであり、この地域に馬とのかかわりを持つ人々が存在したと考えられる。今回の例は三国丘陵周辺の出土例よりも先行し、小規模な墳墓群の中にこのような馬の土壙墓があることで、馬に関する実務集団の存在が推測される。当地への渡来文化、特に馬および馬に関する技術の伝来を知る上で貴重な発見である。

○ 今後の課題

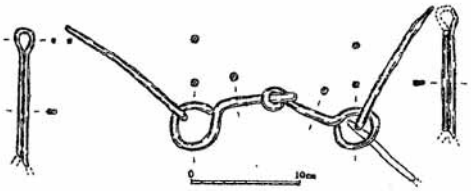
馬の土壙墓は、①特定の墳墓の被葬者のために殉死させられた馬の墓、②自然に死亡した馬の墓、の場合が想定されている。102号土壙墓出土の馬歯と馬具の位置関係の調査と、馬歯を鑑定による年齢推定を行い、埋葬された馬の性格の検討が課題となる。



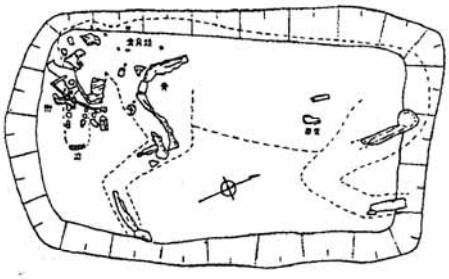


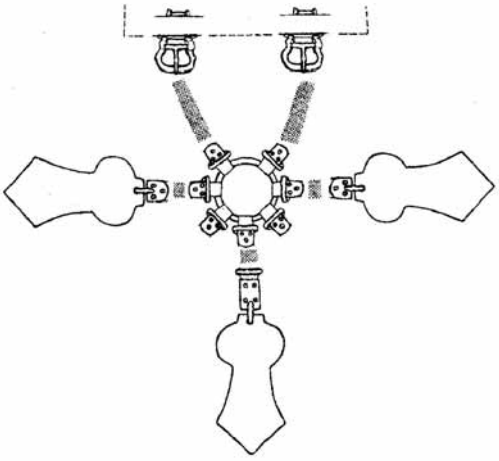


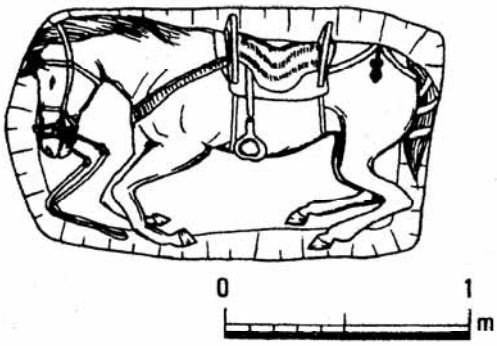
新井原12号墳と4号土壙



物見塚古墳と出土須恵器・馬具

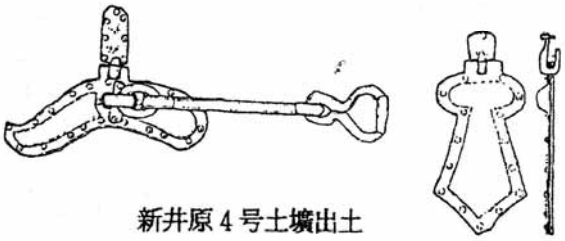






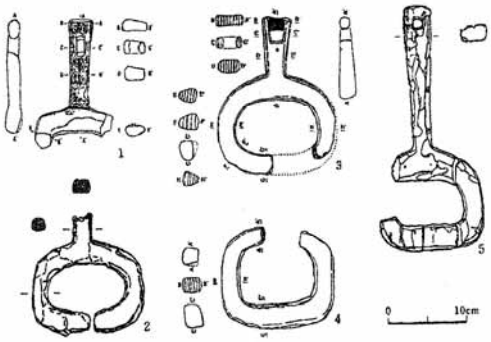
新井原4号土壙に埋葬された馬

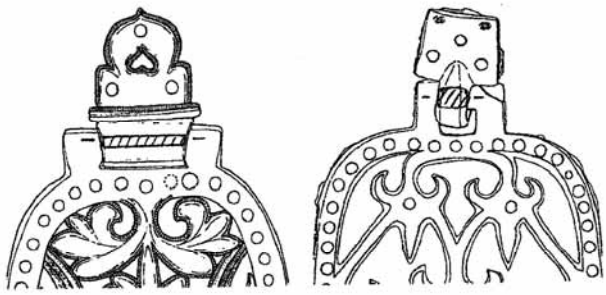
宮垣外遺跡64号土壙出土馬具



新井原4号土壙出土

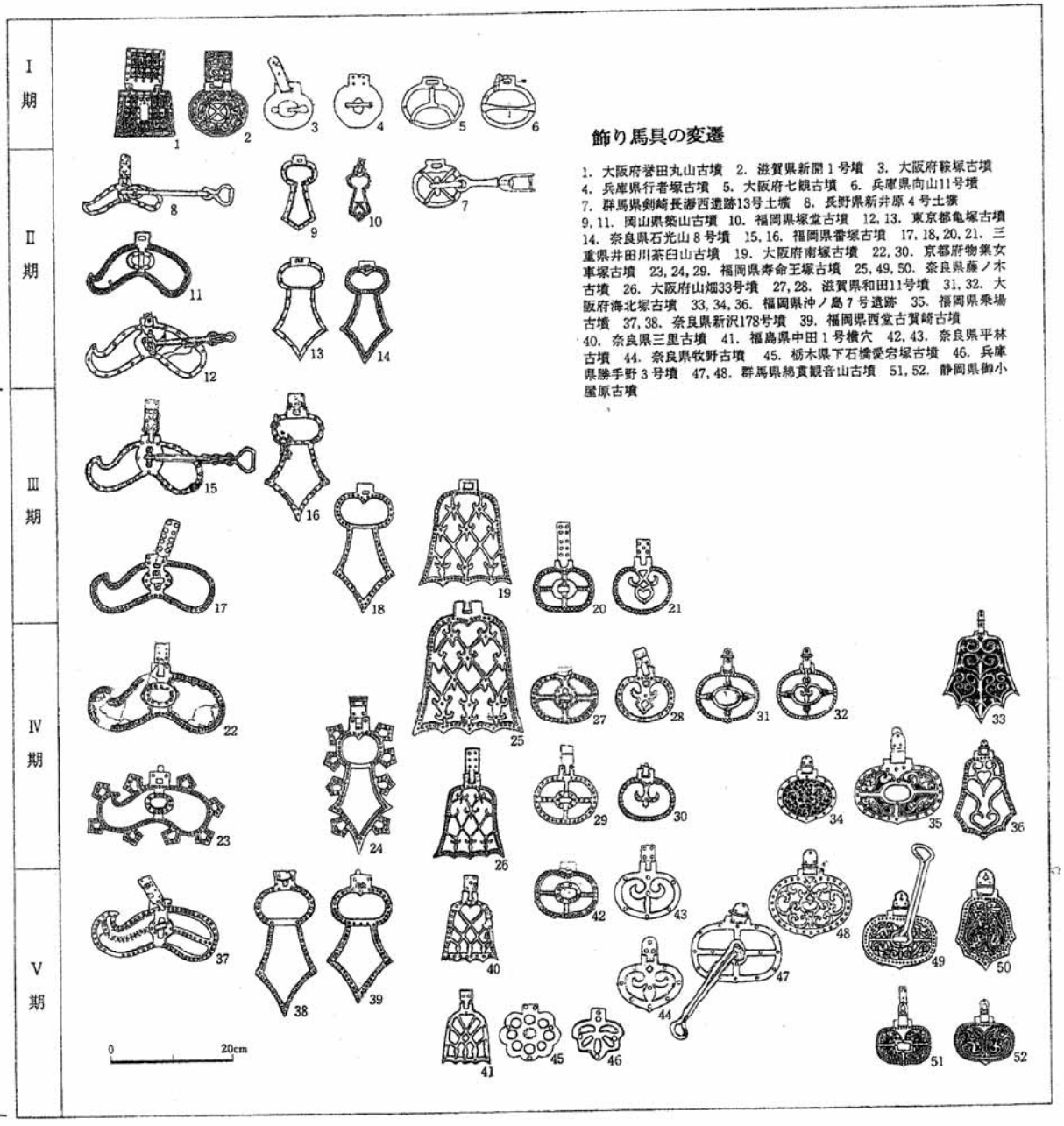
伊那谷の牧（長野県）





鉤金具「新羅系」と「非新羅系」

木製輪鐙　1：奈良県箸墓古墳の周濠　2：滋賀県神宮寺遺跡
3・4：大阪府都屋北遺跡　5：宮城県藤田新田遺跡



飾り馬具の変遷

1. 大阪府誉田丸山古墳　2. 滋賀県新開1号墳　3. 大阪府鞍塚古墳　4. 兵庫県行者塚古墳　5. 大阪府七観古墳　6. 兵庫県向山11号墳　7. 群馬県剣崎長瀞西遺跡13号土壙　8. 長野県新井原4号土壙　9, 11. 岡山県築山古墳　10. 福岡県塚堂古墳　12, 13. 東京都亀塚古墳　14. 奈良県石光山8号墳　15, 16. 福岡県番塚古墳　17, 18, 20, 21. 三重県井田川茶臼山古墳　19. 大阪府南塚古墳　22, 30. 京都府物集女車塚古墳　23, 24, 29. 福岡県寿命王塚古墳　25, 49, 50. 奈良県藤ノ木古墳　26. 大阪府山畑33号墳　27, 28. 滋賀県和田11号墳　31, 32. 大阪府海北塚古墳　33, 34, 36. 福岡県沖ノ島7号遺跡　35. 福岡県乗場古墳　37, 38. 奈良県新沢178号墳　39. 福岡県西堂古賀崎古墳　40. 奈良県三里古墳　41. 福島県中田1号横穴　42, 43. 奈良県平林古墳　44. 奈良県牧野古墳　45. 栃木県下石橋愛宕塚古墳　46. 兵庫県勝手野3号墳　47, 48. 群馬県綿貫観音山古墳　51, 52. 静岡県御小屋原古墳

〔第二面〕

九年己亥百残違誓与倭和

7 通王巡下平穣而新羅遣使白王云倭人満其国境潰破城池以奴客為民帰王請命太王恩[慈]矜其忠[誠]

8 □遣使還告以□□十年庚子教遣歩騎五万往救新羅従男居城至新羅城倭満其中官軍方至倭賊退

9 □□□□□□□□来背急追至任那加羅従抜城城即帰服安羅人戍兵□新羅城□城倭満倭潰城□

10 □□□□□□□□□□□□□□□□□□□尽更有来安羅人戍兵満□□□□其□□□□□□[言]

〔第三面〕

1 □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□辞□□□□□□□□□□□□□潰

2 □以[随]□安羅人戍兵昔新羅寐錦未有身来□□□□□□□□開土境好太王□□□寐錦□□僕勾

3 □□□□朝貢

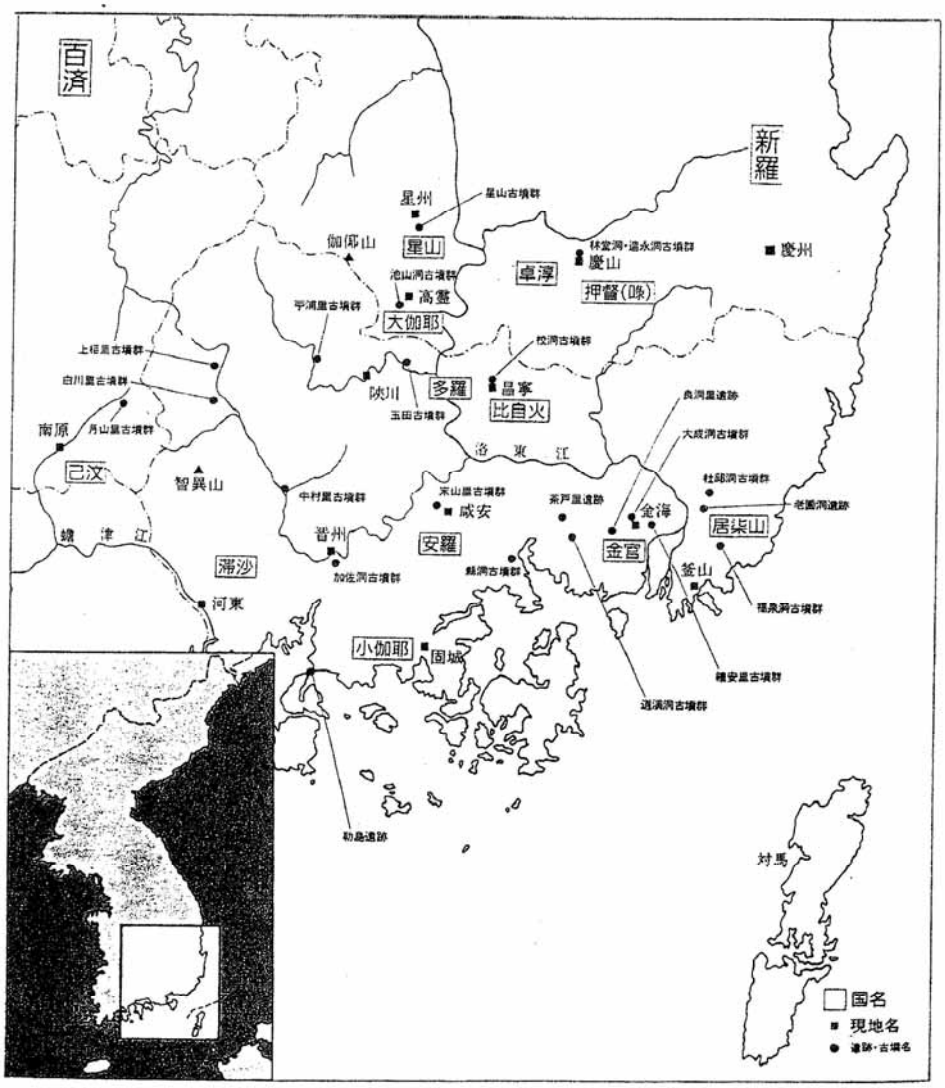
〔第二面〕

九年己亥、百残、誓ひに違ひ、倭と和を通ず。王、平穣に巡下す。而して新羅の遣使、王に白(まう)して云く。倭人、其の国境に満ち、城池を潰破し、奴客を以て民と為す。王に帰して命を請はんと。太王、慈を恩(めぐ)み、其の忠誠を矜(あはれ)み、遣使をして還り告げ□む。以て□□。十年庚子、歩騎五万を遣はして、往きて新羅を救は教(し)む。男居城従(よ)り、新羅城に至る。倭、其の中に満つ。官軍、方(まさ)に至り、倭賊、退(しりぞ)く。□□□□□□□□来背急追し、任那加羅の従抜城に至る。城、即ち帰服す。安羅人戍兵、新羅城・□城を□。倭、満ち、倭潰(つひ)ゆ。城□□□□□□□□□□□□□□□□□□□尽す。更に安羅人戍兵、来ること有りて、満□□□□其の□□□□□□[言]

〔第三面〕

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□辞□□□□□□□□□□□□□潰□。以て随(ことごと)く安羅人戍兵を□す。昔、新羅の寐錦(むきむ)、未だ身(みづか)ら来ること有らず。□□□□(国)□(岡)□(上)□(広)開土境好太王□□□寐錦□□僕勾□□□朝貢す。

西谷　正，1994
「加耶古墳の発掘」
『史淵』第131輯



加耶諸国の位置（『伽耶文化展』（図録）より）

慶尚南道咸安郡咸安邑付近は、安羅加耶の故地としてよく知られたところである。ここの遺跡群の調査が一九四五年の第二次世界大戦終結後はじめて、一九九〇年から昌原文化財研究所によって本格的に発掘調査が実施されるようになった。その結果、一九九二年七月に、開発工事に伴う調査ではあったが、注目すべき発見があった。それは、咸安邑道項里に当たり、四世紀末から五世紀初にかけてのものといわれる大形の木槨墓とその出土品である。この古墳の年代観については、こんごの検討を要するとしても、そのような大形木槨墓が、これまで知られている金海・東萊や玉田などの古墳群だけでなく、咸安の地域でも王族クラスの墳墓に採用されていることがわかったのは大きな成果である。そして、出土遺物のうち、とくに注目したいのは、馬甲が朝鮮半島ではじめて、ほぼ完全な状態で出土したことと、小札を鱗状に綴り合わせた短甲が共伴したことである。馬甲の破片は、これまでに玉田二八号墳などで知られているが、ほぼ完全な状態で出土したのはこん回がはじめてであり、高句麗の双楹塚古墳の壁画に描かれた馬甲の実物資料として注目される。また、同じ双楹塚に描かれた騎馬武人像が着用している甲には、鱗状小札が認められる。同種の小札革綴短甲は、日本の奈良県城山二号墳において四世紀後半のものが知られるだけで、朝鮮半島ではじめて発見された実物資料といえる。これまでに加耶地域で九例と新羅地域で一例が知られる馬冑と合わせ考えると、咸安すなわち安羅加耶における騎馬戦法の存在を裏づけてくれたわけである。安羅加耶といえば、『広開土王陵碑』に見えるように、高句麗軍の任那加羅への進撃や安羅人の戍兵と関連させて、五世初における高句麗と安羅の戦闘を想起するとき、高句麗の騎馬軍団と戦うべく装備した騎馬武人の姿が彷彿として浮かんでくる。安羅加耶は、倭と密接な関係にあったことは、文献史料からも明らかにされているが、考古資料でも、直弧文・筒形銅器・火焔形透孔高坏などを通じてうかがえる。その意味で、安羅加耶の重要な拠点であった、城山山城の東門北側の城壁頂部に立って南方を見ると、谷あいに沿って道路が走り、二〇数キロで昌原郡鎮田面の海岸部に通じる。その先はるかたに倭があることはいうまでもない。